

活動報告

◆診療部

診療部長 田辺大朗

【1.体制】

診療体制は、名誉院長である瀬井先生と麻酔科の尾方先生がともに勇退されたが、新たに済生会熊本病院循環器内科より田中先生が着任され久々にフレッシュな顔ぶれとなり常勤医9人+外来非常勤医の体制で診療を行った。

【2.取組内容と実績】

2023年5月にCOVID-19は「5類感染症」となったが、対策として発熱者外来、COVID-19感染患者の対応は院内感染防止を主眼として継続した。

外来体制は、循環器内科・呼吸器内科・消化器内科・外科・泌尿器科・脳神経外科・整形外科・心臓血管外科・内科外来の他に乳腺外来・大腸肛門外来・糖尿病外来・肝臓外来・腎不全外来・禁煙外来の特殊外来などに変化は無く、新患者数3,255名、年間の総受診者数は34,659名である。紹介患者は1,569名だった。済生会熊本病院と連携して、済生会熊本病院で手術予定の術前患者を当院にて検査を行い、さらにDXを介して遠隔診療を行い患者負担の軽減、診療の効率化を進めている。

救急外来は「5類感染症」扱いになったとはいえ、COVID-19流行は続いており常に感染のリスクを考慮しての対応を続けた。救急外来では、年間の受診者は3,863名で、救急車搬入では777名を受け入れた。大きなクラスターが発生することはなく、救急ストップ時間は最小限に抑えることができた。

総入院患者数は31,486名で、病棟別入院患者数は、一般病棟8,401名、地域包括ケア病棟10,608名、回復期病棟12,477名だった。前年度途中から看護職員の不足のため28床を休床せざるを得ず、100床での運用となっている。総入院患者数は昨年の98.9%で、地域包括ケア病棟の利用は昨年の97.4%と大きく減少している。年度末から108床に稼働病床を増やしたが、120床まですべて稼働できるかは不透明である。

外来化学療法室は、手術後の治療成績向上や、延命／緩和を目的として、生活の質を落とすことなく安全で最大限の効果を得られるように各スタッフの協力の下に行っている。

済生会の基本方針としての生活困窮者への生活全般への支援をMSWが中心となり取り組んでいる。2023年度無料低額診療事業は11.02%と、目標とする10%を初めて超えることができた。

地域医療研修のため当院では研修医を迎え入れている。

2023年度は済生会熊本病院10名と済生会横浜南部病院から7名の計17名が1ヵ月の研修を行った。急性期病院では経験することができない地域での医療の実態をみるほぼ初めての経験となっている。COVID-19の流行で湯島診療所の離島研修を中止していたが、2023年度から湯島診療所の空田先生のご協力で再開することができ、研修医にとっては貴重な研修機会となっている。人口が減少していく中で、地域医療が抱えている問題点に対しどのように対処していかなければならないか、これからの医療を担っていく研修医に考える機会を提供する研修である。

【3.今後の課題】

当院は、急性期治療を終えてリハビリを行い在宅復帰するための中間施設としての役割も担っている。退院後も継続的に支援を行うために訪問リハと通所リハを備えているが、2023年度さらに「訪問看護ステーションみすみ」を開設した。訪問診療と併せ、さらなる在宅療養の充実を図っていきたい。